

DREAM

06 camp in Kojima



2005 sato zeminar



po12



po37



po29

06

DREAM

小島合宿：2005. 5. 6 ~ 5. 7

1章 合宿概要

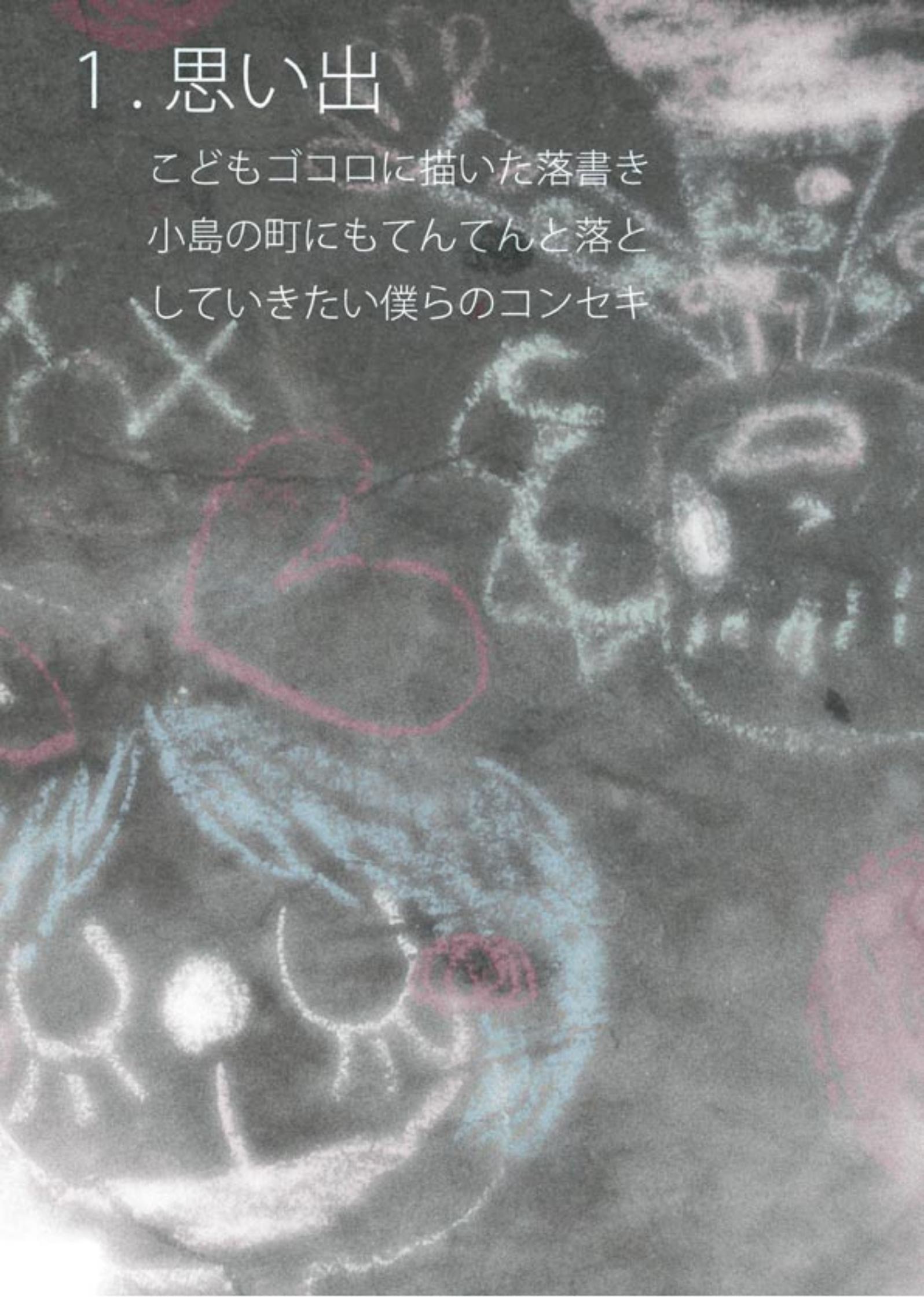
2章 作品紹介

3章 感想

付録 小島地図

1. 思い出

こどもゴコロに描いた落書き
小島の町にもてんとんと落と
していきたい僕らのコンセキ



TIME TABLE

2ND DAY 5.5	
11:00	集合
11:30	ミーティング
13:00	まちあるき出発
13:30	おかず横丁到着
13:45	昼食
15:00	グループにわかれ、 まちあるきへ
18:30	小島小集合
19:30	夕食
22:00	銭湯へ
23:00	飲み会
27:00	そろそろ就寝...
	起床 07:00
	作業開始 08:30
	発表会 13:30
	撤収 15:30
	昼食 16:00
	解散! 17:00
	おつかれさまでしたー
	MEMORY OF "KOJIMA"

1ST DAY 5.4

5.4 11:00

おはようございます。小島小集合時間です。が。集合場所には、あれ？さんにんよにん…？そうこうするうち先生登場。ぶらりぶらりと2Fへ移動し、デザビレ1周年イベントの名残、台東区の古い写真を眺めつつ人が集まるのを待ちます。



5.4 11:30

人も集まってきたので、2F調理室にてミーティング。地図作りのために何もってきましたー？なんて話をしながら頭を働かせ始めます。佐藤先生は私のようなほほ手ぶら・他力本願人間の存在をわかっている、いろいろ画材やら用意してくれていました。流石！コピックについて熱く語る先生が印象的でした。で、本題。今回の目的は「とりあえず地図をつくってみる」。そのメインフィールド「おかず横丁」について説明。この辺に沢山ある工場で働く人のためにできたらしいよー。そして、あみだで発表のためのグループわけ。なんだか面白くなりそうだー★



5.4 13:00

街歩き、開始。

おかず横丁に向かって歩き始めました。普通に歩けば10分かからず着きそうな距離を、せまーい路地に入ってみたり、立ち止まって家を眺めてみたり、写真をとったりと・・・結局30分ほどかかったんじゃないかな。とにかくみんな自由気ままでしたよね。この写真も、そんな自由気ままな姿の一例です。みんながカメラを向ける先には、何があったんだろう？そして、世一くんは、何がしたかったんだろう？？（人様の家のもの、勝手に開けちゃダメですよー！）



あれ、この写真は、前の写真の続きじゃないですか！？
 そうか、みんなが見ていたものはコレだったんだね！ …って…やっぱり何見てるんでしょうか…?? 私には見えないものが、見えていたのかもしれない。なーんて。普段ならナカナカ気にとめないモノも、こうやって改めてじっくり歩いてみると、すごく気になるモノになっちゃうんですよねっ。



こんにちワン！僕の名前は小島の「コージー」。
 今日はなんだか外が騒がしいと思ったら、早稲田の学生がたくさん来ていてびっくり。みんな、カメラやらビデオを手にしてきょろきょろあたりを見回している様子。あっ！学生の一人と目が合っちゃった。ぼちり。シャッターを切る音。不意を突かれて僕はお得意のポーズを決めることが出来ず…でもなんだかみんな笑顔。その笑顔に僕もワクワク。
 今日は日差しが強くてついつい日陰に隠れていたけど、散歩に行きたくなっちゃった。
 そうそう、僕の小屋は椅子と机。でもなかなか快適なんだなこれが。学生のみんなと一緒に勉強したいなあ、なんてね。

さて問題です。本村さんはなぜ電話をしているのでしょうか？

- ①あまりに風が強くて、空まで飛ばされそうになってしまったので大急ぎで助けを呼んでみた。「助けてください！」
- ②小島の町を散策していたら、建物に見とれているうちに前後左右のどこから来たのかがわからなくなり、他のメンバーを探していた。「みんなどこ〜？」
- ③急に、京都の友達から飲みに行こうと連絡が入った。

正解は、残念ながらこの写真を撮ってくれた人にしかわかりません。あしからず。本村さんはおしゃれていつも素敵なお洋服を着ています。本日は明るい色がたくさん入ったストライプのワンピース。70年代の雰囲気が出てどこか懐かしい感じがします。レトロさは小島の町並みにも負けてませんね。



玄関のすぐそば、というか玄関そのものがおそらく硝子一面でできている工場の前での一コマ。硝子に向けて写真を撮ると、たいてい反射して光ってしまうものなのですが、さすがは硝子屋さん、職人さんの技が冴えています。硝子は全く光らずに、ビデオを構える杉本さんとカメラのシャッターを切る小川さんをきれいに写しています。小川さんのカメラを構える手、様になりますね。本物のカメラマンみたい！「今、私は重要なシーンを撮ってます！」といったような。そしてその横で口を空けて、おあーっと感嘆しているのが私。それにしても、この硝子はきっと、中からは外の様子が見えて、外からは中の様子が見えない「からくり硝子」になっているんですね。実は「何撮っているのだろう？」とこの家の人に思われていたりして…



5.4 13:30



ついに！おかず横丁に到着ですっ！！今回の合宿は、この横丁を中心に、地図を作ることが一応の目標です。ところどころに飾られている提灯とお花っぽいキラキラが、とても華やかな雰囲気をかもしだしていました。ま、あゆみちゃんの華やかさには敵っていませんけれども☆そのポーズが大好きです☆☆先生も何気に写っていますので、お見逃しなく。

5.4 13:45

さてさて、お腹もすいてきたのでそろそろお昼ごはんです☆おかずおかずとつぶやきながらここまで来ましたが、生憎GW中でおかず横丁のお店はほとんどお休み…。そこで、蔵前橋通りのお蕎麦屋さん「ますみ」にやってきました。思い思いのおそばを食べつつ、グループ毎に発表にむけて打ち合わせ。どのグループも話が盛り上がっているみたい！

5.4 15:00

お腹いっぱいになったところで、グループにわかれてまちあるきへ出発！
これ以降、不審な学生の姿がおかず横丁近辺で目撃されるようになります。いろいろな人に話しかけたり、写真を撮ったり、え？原稿用紙…！？他のグループの動向がとっても気になるのですが、それぞれ地図作りのため調査・素材集めにあちこちへ奔走！調査後のごほうび（かき氷）のためにがんばります！



まちあるきの途中には素敵な出会いが。この方はおかず横丁にあるお味噌屋さんのご主人「GUN爺」こと郡司さん。かつての小島地区、おかず横丁について、古い資料を片手にお話をしてくれました。GUN爺の熱いトークに、一同たじたじ…。

この写真からは、ちょっとしんみりとした雰囲気漂います。

近くにできたスーパーの影響で、どんどんお店の少なくなっているおかず横丁。この日は休日ということも重なっていて、開いているお店は思ったより少なかったです。

人通りもそんなに多くはありませんでしたね。

半日歩き回って、みんな何を考え、何を得たんだろう？疲れた私たちを夕日がやさしく照らしています。



5.4 18:30

集合予定時間ですよー。でも、やっぱりみんな集まってませんよー。
この合宿中はほんとうにのんびりとゆるりゆるりと時間が流れています。小島の雰囲気がそうさせるのかな？まあ、いつも通りといえばそうかもしれないけどね。この頃、私はかき氷による胸焼けに苦しんでおりました…。

5.4 19:30

お好み焼き・もんじゃ焼きのお店「巨峰」にて夕食。私たちの訪れによって小さな店内は一気に慌しくなり、本村さんもごく自然に料理を運んでおります。焼きの作業にもたつく私達に名物おばちゃんの厳しい指導が。おばちゃんの鋭いまなざしに、佐々木君もおもわず苦笑い。

おばちゃんの教訓：もんじゃは土手を作らない！



広島風お好み焼き。うどんバージョン。おばちゃんの手が鉄板の上を軽やかに踊るたび、食欲をそそる音と香りが立ちのぼる。その鮮やかな手つきに見とれることしばし、みるみるうちにお好み焼きは出来上がった。まさに、職人技。おばちゃん曰く、広島風お好み焼きは大阪伝来のものらしいです。



「いや～島田課長、いい顔してますね～」

「そんなことはないですよ。今日も一日充実したなあってただそれだけですわ」

一日目の小島散策調査を終えて夕食を食べながら、そんな会話が飛び交いました。

島田氏は途中参加のため、一人で歩き回り調査をしてようやく一息いれたところの様子です。目の前にはおいしそうに焼けたお好み焼き。調味料を入れた小瓶と島田氏の笑顔がマッチした一枚になりました。お好み焼にはソース、マヨネーズ、かつおぶし、あおのいとたくさんの味付けをする。いろんな味が混ざり合ってずっとずっと美味しくなる。こんなたくさんのトッピングを同時に使うことを考え付いた人は天才だ。私たちもこれから先、個性という名の味付け道具をたくさん持ち寄って、お好み焼きみたいにおいしいゼミにしちゃいましょう！



5.4 22:00

いやー、美味しかった楽しかった！そして、一行は近くの銭湯「三筋湯」へ。残念ながら、私は銭湯に行っていないので、栗原君に報告していただきます！因みに非銭湯組は小島小にてまったり。アイスアイス～★この間に山口さんが風のように現れ、風のように去っていきました。

若干の違和感があったのは金魚がいたこと。なかなか文章で表現するのは難しいのだけれど描写を試みよう。まず、確認しておきたいのは、銭湯の外が池になっていること。そして銭湯とその池を隔てるものはガラスであること。つまり銭湯につきりながら外の池を泳ぐ金魚を鑑賞できる、という。三筋はそんなステキ銭湯ですので皆様どうぞ足をお運び下さい。

5.4 23:00



佐藤先生がビールとおつまみをもって銭湯より帰還。当然、飲み会が始まる。今日はもう作業できないな、このまま飲んで寝るな、と誰もが感じていた。ハナマサにて仕入れてきた第三のビールに舌鼓をうち、他愛もない話で盛り上がる。栗原HPを見たり、100ハイについて話したり。まだまだ元気な女性陣を横目に、佐藤先生はすっかりお疲れの様子。

上の写真から数時間後。まだまだ語っております。屋上に行ってみたり、学校を探検してみたり。この頃、ジョージが「子供がいた」と言い出し、女性陣大絶叫。これ以降、誰も一人でトイレに行けなくなる。後に、それは先生の姿だったということになったが、果たして…。笑顔の小川君に襲い掛かる謎の手の正体は…！？消えた井上さんの行方は…！？佐藤先生、もう完全に寝てます。



5.4 27:00

眠気に耐えかねた佐藤先生が布団を引き出したのをきっかけに就寝態勢へ。私も周りのアカデミックしりとりを子守唄におやすみなさ～い…。

5.5 07:00

おはようございます。誰に起こされるわけでもないのだけれど、みんな少しずつ目覚めはじめます。目覚めは悪くなかったものの、なぜか体が重いい…。無性に家に帰りたくなり、私は一時帰宅。その後、みんなはローソンまで朝ごはんの買出しに行き、地図作りの作業を始めたみたいですよー。

5.5 08:30

ママチャリ万博組のゴウ君と僕は2日目の朝から合流。

デザイナーズ・ビレッジに着くや、大量のスチレンボード（ハレパネ）が散乱する班の席に何の気なしに（模型チェックなおいに釣られてか？）着席。流れてその班のプレゼンを手伝うことに。ここで建築模型作成経験ありの僕がここぞとばかりに秘技『スチレンボード紙一枚残し貼り』を彼らに伝授！「おーっ」という声が上がリ、僕は少し鼻高々。僕らの班以外作品制作を終えたらしく先生の無言の「早くしろよ」というプレッシャーを受けながら何とか完成！と思ったら、設計ミスで組み上げられないパーツがあることが判明。そこには栗原君の悲壮な顔がありました。



5.5 13:30

いよいよ、各グループの発表へ。

トップバッターは看板建築グループが務めてくれました。パワポを使った説明は簡潔でわかりやすい！「張りぼて」の写真には驚きと笑いが。



この写真の跡に悪魔的・呪術的・黒魔法的・細木数子的なビデオが始まります。まだこの頃はみんなの表情も穏やかでした。ビデオを見たみんなのBeforeとAfterの写真があったなら凄いいことになっていただでしょう。ただ写真の中のジョージ君の不敵な笑みと佐々木君の冷静を装ったかのような『休め』の姿勢が今となっては、いやに気になるところです。



3番目に登場したのは今回唯一、個人作業での制作を行った「ハマの番長」こと島田君。その名に違わぬ堂々としたプレゼンぶりに、僕たちもプチプチの手を少しも緩めることなく聞き入った。アイデアも「小島」を「島」に見立て、さらに、さりげなく「島田」の名前もアピールするという大変よく練られたものであった。そんな島田君にすっかりヤラした僕には、彼に後光が差しているように見えた…。

そしてラストを飾ったのは、はみだしBOXグループでした。自分のグループなのでコメントは省略で…。全4グループ、バラエティに富んだプレゼンテーションでした★パワポあり、映像あり、模型あり、地図あり…って、あれ…？“地図”でないものもいろいろあったけど、大事なのはそこから何を得たか、だよな？その辺についてはこの後の作品概要ページと感想ページにて。そうそう。2日目から参加の白石君、市川君、松本君の3人からは昨日までの旅行記のプレゼンがありましたよー。それにしても、自転車旅行組は前日まで連日ハードな運動しておいて、今日普通に來れることがすごいです。。そりゃあんだけ日焼けするよねえー。

5.5 15:30

楽しかった2日間もあっという間に終わりを迎えました。楽しい時を過ごした小島小ともここで別れ。また来るよー！ありがとー！！

5.5 16:00

頑張ったあとにはお腹がすくのです。みんなで佐竹商店街の焼肉屋さん「ばんが」にてお昼ごはん。“焼肉”なんて食べませんでしたけど。やはり、王道ビビンバが人気のようです。美味しかった～☆

5.5 17:00

これで小島合宿の全行程が終了！
この2日間ですべて仲良くなれた気がします★楽しかったな～★☆☆
それじゃあ！また、来週の授業でねっ！！

5.5 20:00



商店街で解散した皆が家路に着く
中、栗原・白石・僕の3人は再び
小島小へと足を向けた。そう、編
集委員とは名ばかりで、実のと
ころ編集ソフト、というかパソコン
を何も使えない僕のために先輩2
人が直々にスキル伝授をしてくれ
たのだ。3時間30分に及ぶ徹底指
導の結果、日もとっぷり暮れた頃
にひとつの作品が完成した。初作
品ということで豪華にメード・イ
ン・小島の光沢紙を使って印刷。
感動のあまり歯をいっぱいに出し
て笑う僕と、なぜかウイニングボ
ールを手にしている白石さん。夜
の小島には初夏を感じさせる爽や
かな風が吹いていた、気がする。

AND...

この人なしにこの合宿、この授業
はありえなかった。そんな偉大な
先生の素敵一枚で合宿の思い
出をしめくくります。
佐藤先生ありがとー！
これからもよろしくねーっ！！

COMMENT

市川 郷
加藤 茉莉
栗原 智
白石 昂之郎
富樫 久美子
土井 麻里子

*名前とコメントのフォントをリンク
させてあります*



2. 作品

じっくりと考える
時間は無かった。
一泊二日、それでも
こうして形を
残せたことに
意義があるだろう。

1. タイトル

瓦屋根上小空間で主婦は空想にふける
＋
看板建築

2. メンバー

小川秀幸、富樫久美子、土井麻里子、世一英佑

3. ねらい

視点を変えたことによって見えてきたまちの知られざる側面、
その発見を皆と共有すること

4. 発案までの経緯

おかず横丁で僕たちは行きづまりを感じていた。そこで気分転換のために通りのわきにあるかなり高いビルにとにかく登ってみた。そこから町を見下ろすと、下からは見えなかった、屋根上の小空間があちこちに偏在していることに気付いた。また、表から見ると豪壮な建物も、上から見るとはりぼてではないか。「何なのコレ」「わからない」「じゃあこれをテーマにしよう」

5. 作業工程

様々な角度から写真を撮り、それをわかりやすい順序で並べた。
また、上からの写真だけでなく下からの視点（普通の視点）も交えることで、そのギャップを際立たせた。

次に、「何故、このようなものが存在するのか」ということについて推理した。そして住人に直接聞いてみた。屋根上のおばちゃんは「わからない。大家さんに聞いてみたら」と言ってにっこりと笑った。僕たちは大家の家（しかもこの大家の家は看板建築なのだ。一石二鳥である）を訪ねた。するとかなり高齢の男性がでてきはった。「あのスイマセン、僕たちワセダの」「オア!？」耳が遠いんだな。会話が成立せず、残念なことに話は聞けなかった。

そこで学校にもどり、写真をパワーポイントに落とししたり、推論を整理したりしながら、我々は発表にそなえた。

6. 作品紹介

ビルの上から街を見てみると…見えなかったモノが見えてきました。
2軒の家をご紹介します。

まず1軒目↓

家を上から見る2



下から見上げると、屋根の上のスペースは見えない



屋根の上に物干し台が乗っています。 場所確保や日当たりが目的だそう。
狭い土地の活用法ですね。

次に2軒目↓

素敵なお店です。

洋風な商店(正面)



→

横から見ても立派ですね。

サイドに回ってみる



→

けど

張りぼて ←

実は

全貌



何でこんな形なのか? 「日本風建物を洋風に見せたかった」「大きく見せたかった」
などなど、私達も仮説(?)を色々考えましたが…
どうやら『看板建築』という造りらしくて、商店をりっpに華やかに見せるためのよう。
これも商人さんの知恵ですかね??

1. タイトル	はみ出しマップ
2. メンバー	オダイラマユ カトウマリ クリハラサトシ シライシコウシロウ イチカワゴウ
3. ねらい	本来居住スペースに収められているべきものたちが下町では多くの場合露出している。例えば植木がそうだ。彼らは基本的に庭にあるべきだし、回覧板は玄関の中にあるべきで、忘れられたように門扉に立てかけられているべきではない。そのように居住スペースからはみ出た様々な要素を地図上にプロットしていくことで、内と外という境界の曖昧さを示し、下町の特性を再認識してもらうことを意図とした。
4. 発案までの経緯	そば屋で。 撮ってきた写真をみつつ、何を見ていたかを話あっていた。道路が住居の延長として捉えられている、という点に着目。覗き見気分、その家に住む人の私生活を垣間見せるような要素を抽出し地図にしようという話になった。
5. 作業工程	<ol style="list-style-type: none"> 1、調査区域を決める。 2、分担して、要素に当てはまるようなものを写真に収めていった。 3、写真を見ながら、どう地図にしようかと話し合う。視線の先にはスチレンボードがあり、それを使って立体にしようという話に。 4、写真をプリントアウトし、写真の中にある要素にシールを貼る。 5、シライシ、ゴウ、両氏の協力のもと、写真をボードにはっていく。 6、ボックスを組み立てて完成。
6. 作品紹介	



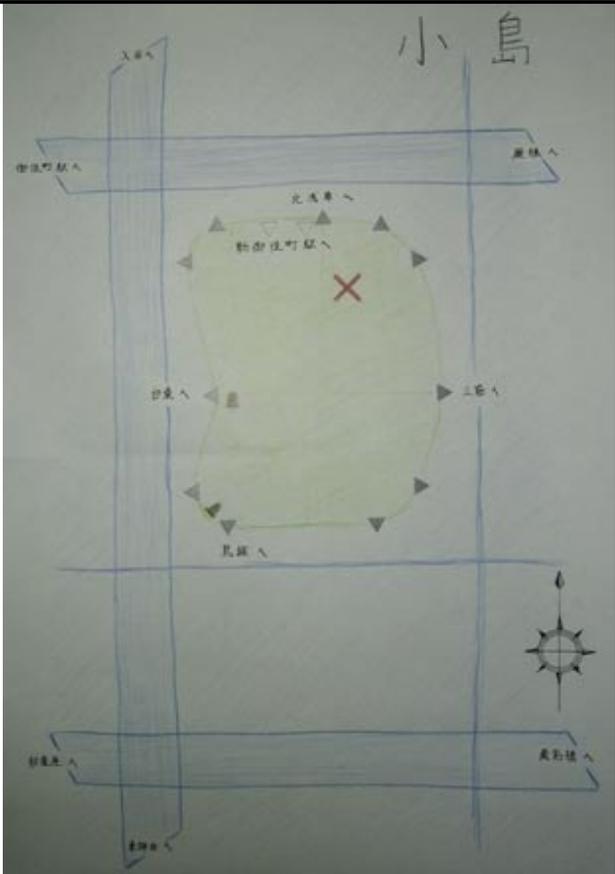
1. タイトル	小島の地図を作る
---------	----------

2. メンバー	島田陽介
---------	------

3. ねらい	小島のまちを島に見立てて地図を作る。 地図としての有用性より、島っぽく見えることを優先する。
--------	---

4. 発案までの経緯	単なる島つながり。だが、町歩きの中で、わりと妥当な目的であることが判明した。小島の土地はもともと沼地であり、江戸時代にそれを埋め立てて町を作ったそう。いわば沼の上に作った島である。現在では当時の堀もなくなり島の面影はない。しかし島っぽいところはある。隣町とは幅の広い道路で仕切られる一方で、町中には信号機もないような狭い道路ばかりなのだ。
------------	---

5. 作業工程	地下鉄の駅は港か、信号は灯台か、などと島気分を演出しつつ小島の周りを一周してみた。このときに「三味線掘跡」を訪れ、上述の埋め立ての話を知った。その後も小島をうろついてみたものの、結局収穫はそれだけで、具体的な地図は思い描けないまま次の日になってしまった。 翌日。中身がないので、せめてデザインだけでも頑張ろうと精一杯悩んでいた。町をどんな風に描くか、他の町とのつながりをどう表すか等々、島のイメージを作り上げるのに苦労した。なるべく現実感を排除することで、島っぽく見せることができたと思う。 島の中をもっとしっかり描ければ、一般の人にでも楽しんでもらえる地図になったと思う。
---------	---

6. 作品紹介	
<p>▲歩行者信号 △地下鉄新御徒町駅入り口 ×デザイナーズビレッジ</p>	

1. タイトル	「トリゴエゲンゾウ」
2. メンバー	杉本、本村、佐々木、松本、小川
3. ねらい	<p>おかず横丁の1ブロック内にある文字を総て、もう洗いざらい取り出すことで今まで意識していなかった、自分の世界の外側にある文字の存在を知ろうとした。無意識の世界へのつかの間の脱出を試みよう。原稿用紙に載せていくことで総ての文字を等価にすることができる。色々な場所に散らばっている文字を集積してしまおうではないか！！（でもそのうちに再び拡散しようとうごめき、ああ、文字は溢れ出ようとするのです）</p>
4. 発案までの経緯	<p>杉本君のポエム地図を作りたいという一言から私たちの文字への執着は始まりました。文字文字文字・・・じゃあ全部写そうか、と。</p>
5. 作業工程	<p>簡単です。文字を原稿用紙に写しただけです。単語と単語の間にはわざと空白を入れませんでした。びっしり文字!とことん文字。そしてビデオカメラで原稿を読む様子を撮影しました。大体は単調に、時には言霊と戯れるように。目と手と口をよく使った気がする。</p>
6. 作品紹介	<p>おかず横丁一区画の文字全てを詰め込んだ作品。原稿用紙に書き写した文字をそれぞれが声を出して読み上げ、それをデジタルビデオカメラで撮影し映像にする。読み上げられた文字は言葉となって、視覚情報のみならず聴覚情報としても発信される。様々な文字が原稿用紙上で無秩序に書き連ねられており、文章としては意味を成さないかもしれないが、キーワードとして耳に残るものがいくつも存在する。例えば「dydo」。自動販売機だけで2000字もの情報がある。「未成年の飲酒は法律で禁じられています」といった禁止項目が目立ったし、「文化シャッター」も多くの家に見られた。</p> <p>撮影地は小島小学校であったが、おかず横丁で撮影できれば良かったと思う。読み方も棒読みではなく少し工夫を凝らせば違った雰囲気の商品になったかもしれない。作品は5分程度で、PCを使って映像を編集。文字を水に流すところから始まり、各自の音読、そしてまた文字を水に流すところに戻って終わる。</p> <p>作り終えてみて、やはり「地図」というより一つの「アート」としての要素が強いと感じた。今後どういうカタチの地図を作っていくべきか考えさせられる機会になった一方で、成果をとにかくカタチに表す事の大切さを学んだし、文字を使った点や映像としての作品を作り上げた事は今後につながるだろうと思う。</p>

3. 感想

まち歩き

真面目に？まったり？

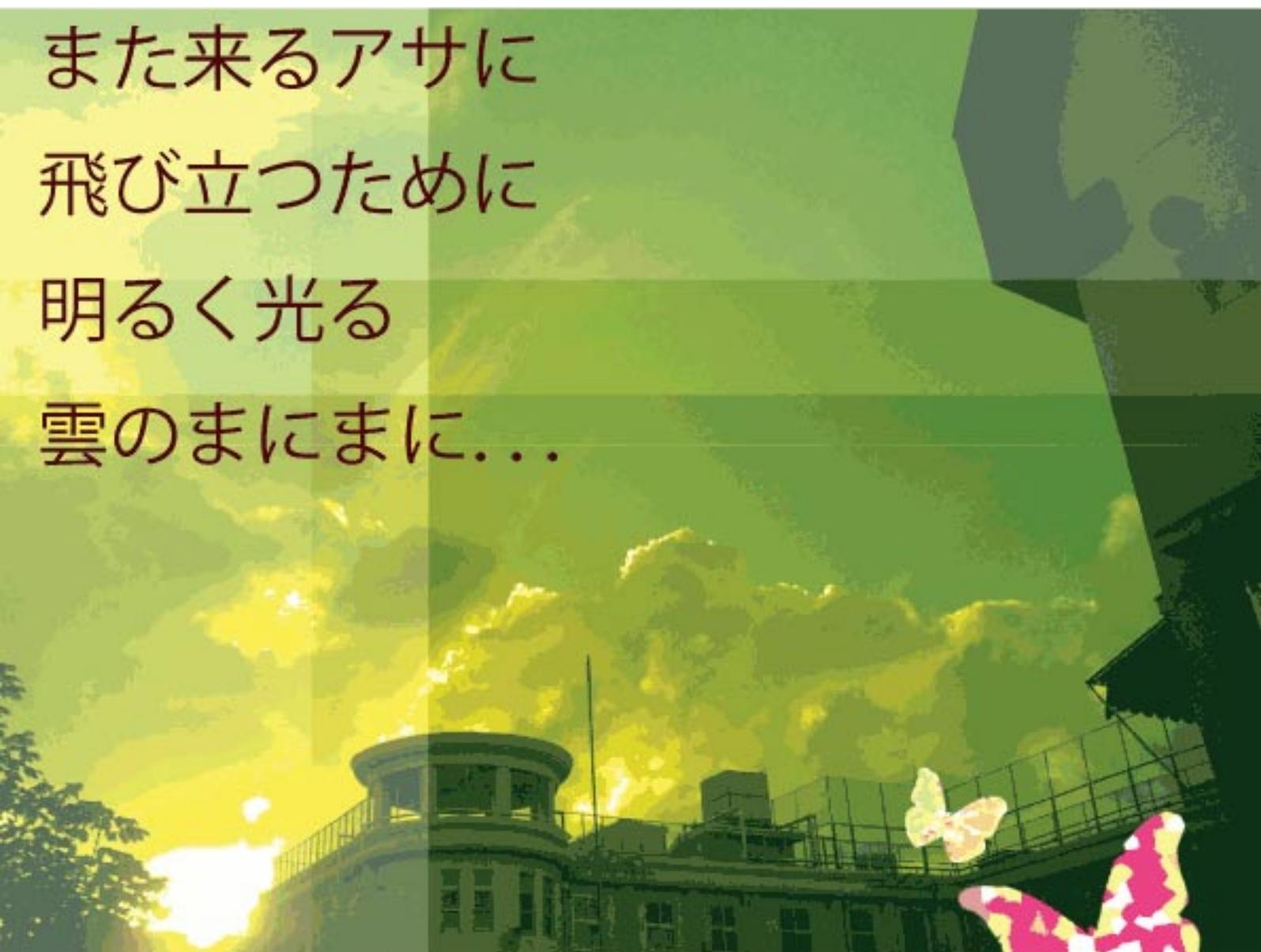
振り返る

また来るアサに

飛び立つために

明るく光る

雲のまにまに....



みんなでお好み焼きを食べたり、銭湯に行ったり、寝袋を敷いて明かりを暗くして、お酒を飲みながらたわいのないことをだらだらと語る、といった修学旅行的な雰囲気、僕たちはすっかり陶醉していました。みんなとゆっくり話をできたのが、とてもうれしかったです。僕は一部の好戦的な人たちと朝の五時までしとりをしました。

しかしこのようなある意味、退廃的な雰囲気は、翌日には消え失せていたのが素敵。

朝ご飯を食べた後は、各グループ精力的に仕事に励みます。締切り時間直前は皆殺気立っていて、その心地よい緊張感を持続しながらの発表の時となりました。どのグループも魅力的なプレゼンでしたが、僕にとって最も印象的な発表をしてくれたのは、島田君でありました。僕は明らかに彼を甘く見ていました。かなり濃いメンバーがそろっているこのゼミの中で、僕は島田君のことを、「笑顔が素敵だけ普通人」くらいに思っていたのです。ごめんね。しかし、彼がしたプレゼンは、一人で、しかも短時間で仕上げたものであるにもかかわらず、イマジネーション豊かな、そして斬新なものでした。「俺一人でやったら、あれほどの発表をできるだろうか」こう考えると、危機感すら感じました。おびやかされました。

もう一つ言及しておきたい点は、発表後の皆の反応の良さです。真剣に耳を傾けてくれるだけでもうれしいのに、発表後には質問や感想、あるいは提案が活発にやりとりされました。特に印象的だったのは市川ゴオ君です。発表の内容をしっかりと理解した上で、生産的で創造的な提案の連続には舌を巻きました。また、インテリジェント栗原氏の、一歩引いた観点から生み出される冷静な発言は、飛びがちなメンバーが多いこのゼミにおいては良いスパイスになっていると思います。山椒は小粒でもびりりと辛いってか。そういえば栗原氏は外見も山椒っぽいような気がします（色合いとかが）

今後、もっと、小グループによる活動を増やしていくべきだと思います。全員でぼんやりと、「これからどうしよう」と考えているよりも、2～3人のグループに分かれて、具体的な提案を多数出す方が、生産的でありましょう。他グループへの対抗意識が、発表に向けての強力な推進力になることはこの合宿で証明されていますし、少人数での作業は、各人の持ち味をより鮮明に浮かび上がらせませす。

なにしろ僕は今まで何でも一人でやってきたので、なんつうかな、このゼミのみんなと一緒になにか面白いことができそうな予感ができて合宿中、ちょっと涙ぐみそうになって危なかった。と、最後はほのかに青春的な要素におわせつつ、お仕舞い。（世一英佑）

「張り出し」班

看板建築の存在をはじめて知った。おかず横町を歩いたとき、平屋根が多いなと思ってしまったのだが、看板建築の手法にまんまと騙されていたわけだ。プライバシーの空間が上に張り出していくという話も面白かった。

文字班

このアイデアはとても斬新だ。実行した根気もすごいと思う。町の文字を全部なくしてみたら…等々、面白くなる可能性をたくさん含んでいることもわかった。町を観察する上での新たな視点を得ることができた。

「はみ出し」班

プライバシーのはみ出しが意外に多くて驚いた。プレゼンテーションの方法も驚きだったが、時間がもっとあれば、よりわかりやすい模型が作れたのだと思う。立体の地図は作ってみたいだったので、こういう方法もありなのだと思った。

自分の作った地図と今後

他人の意見を聞いて面白いと思ったのは、実際に人の動きを調べたらどうか、ということだ。今回の自分の地図は、時間が足りなかったこともあり、町の中の情報が少ない。町をもう少し詳しく描き、そこに人の動きを書き加えれば、面白い地図になるだろう。一人でも地図を作れるのか、とうれしい意見をくれた人もいたが、やはり個人作業ではやれることが限られてしまうし、アイデアにも広がりがなくなる。

今後、授業がどのような展開をするのかわからないが、いろいろとやり方があると思う。最初は個人作業からスタートして、次第にグループ化していくと、それぞれの個性を活かせるような地図ができると思う。また、グループ作業から始めた場合も、飛躍した切り口から地図を作れるかもしれない。

巨峰

もんじゃ焼きは土手を作らない。味が均一になるように混ぜて広げる。

反省点

一日目の夜は、飲んだけで終わってしまった。酔った頭で小学校中を歩き回るのは楽しかったが、もう少し真面目に地図作りをしてよかったかなと思う。（島田陽介）

グループ行動が苦手なので今回のグループワークもどうなるか少し不安だったのですが、まず素晴らしいなと思ったことはみんなのアイデアがすごく斬新だったことです。『いいね、やってみたいね』って思われるものばかりだった。このことを体感できたってだけで私の合宿はかなり有意義なものになったと思う。グループでああでもないこうでもない言いながら一つの作品を作るってのはとんでもない力を秘めているなど今更ながら思ったわけでした。

私たちが行なった文字を拾い上げるという作業だけ、私はこの作業を通じて、たった一アロクなのに（しかもほとんどの店は休業日なのに）原稿用紙16枚分？になるってことに驚きました。で、私には原稿用紙の文字は、もはや何の意味も持たない無機質なものに見えました。文字が独立してしまった感じが。おかず横丁って場所からするとと抜け出してしまった感じとでもいいでしょうか。あびぢでつおそいこゆ←すごい適当に打ったものですが原稿用紙の中の言葉もこんな風感じられました。こうやって取り出した文字をどうやって調理すればいいのかは本当に難しい問題だと思います。発表までにもっと時間が取れていたなら私ならどうしていたか考えたのですが、映像を使うなら、読み手の画はい

らなかったかもしれません。そのかわりにおかず横丁の画面をひたすら映す。一軒一軒なめるように。それに声を合わせる。そうすれば見る側にも分かり易いものになったかもしれない。少しは。もっと分かり易くするために、カメラが動く行程を表す地図をおかず横丁の映像の上に重ねてもいいかも。あーうまく説明できないけど、コナンの追跡眼鏡みたいな地図をシンクロさせる感じ。もしくはもう文字の形や発音は一切無視して、一文字一凸にして凸の場所を地図に表すとか。イメージは点字。手で触って凸(文字)の多さを実感できるように。ただ、地図するのは人の興味を引かなくちゃ意味がないような気もするから、これじゃやっぱり自己満足の域を出ないのかもなあと思いますが。ふーんそれが？で終わってしまったらどうしようもない。面白くて役に立つツールとしての地図ってなんだろうなあ。そういえばちらっと考えたのは文字(視覚)があるなら音も触感も臭いも地図に表すことができるかなってことです。視覚イメージより遥かに難しくなりそうだけど。(小川七恵)

今回は途中参加、途中抜けという形で、発表も全て見られなくて歯がゆかったです。一応参加してみたい感想を述べてみたいと思います。私たちの班は課題をクリアするというより、気楽に町を楽しむことに徹していました。そのせいで終盤かなり焦ることになりましたが、初めての町をまず無心で好きなように眺めること、これは大切なことだと思います。何より楽しい。興味惹かれるものを更に深く掘り下げていくことは発見の喜びがあるし、そのあとで地図の形へと昇華させられればかなり面白いものになるのではないのでしょうか。

ただ、他の班の発表を見させてもらって思ったことは、見せることも重要だということ。表現である以上、自己満足に陥ってはいけなと思いますから、一般から見て、面白いものを作らなければならない。そのためには手段ノウハウを駆使することがネックになってくる。現段階ではどんなことができるかまだ自分は知りきれなと感じました。そこにまず習熟したい。色々作品も見たいですね。

最後に。デザイナーズビルはとて面白いものに溢れているのが印象的でした。あのような作業場の空間に足を運んだりすることは今までなかったものですから。面白いと感じたものを日常的に貪欲に形に落とし込めようとする人々がいるということ。それに感銘を受けました。(小川芳幸)

5月4日、一日遅れて「町の地図」の合宿に参加した。その前日は、一日群馬に行って、帰りに渋滞に巻き込まれながら深夜に帰ってきていたので、当日の少しの疲労は否めなかった。だが、その日はとても良い一日で、自転車でお島まで行く道りはとても気持ち良かった。着くと、文字班の杉本君、小川さん、佐々木君が作業をしていた。作業というのは昨日に「おかず横丁」を歩いて、その道にあるすべての文字を原稿用紙に書き写したものを読み返してみるという作業だった。

このグループは、普段は見過ごしてしまいそうな街にある「文字」に

着目し、それを文字として表すことでなんらかの表現をしてゆこうと考えるグループだった。話し合いの結果、その文字を映像として表現しようということになったようだ。発想の面白さに惹かれて、一緒に作業をさせてもらうことにした。

私たちは、原稿用紙に書き出した文字を言葉として表現することを通して、映像作品を作ることにした。時間が無かったという理由から、学校内で原稿用紙朗読という形になった。しかし、僕としては実際にその街で映像を撮ることで、普段は見過ごされがちな文字の情報をピックアップされ、新しい視点で街を見るきっかけになり、よりよいものになると思っている。

作品は、佐藤先生の映像処理技術、杉本君の斬新な表現、小川さんの撮影テクニック、佐々木君の送ってきた僕への手厚いフォローにより、面白いものに仕上がった。地図としては、全く的外れたものとなってしまったことは否めないが、ひとまず形になったことは評価できると考える。周りからの評価も、ひとつの道に80000字もの文字の情報があるということに着目したという目的付け所はよいという指摘を受け、これからも「文字」という視点をういて、表現方法を探っていく印象を受けた。これから、どのような形になり、人々が使えるような「地図」となるのが楽しみだ。

その他にも、看板建築を工夫を凝らして探し出した富樫さん、世一君、小川くん、土井くんのグループは、表から見ると実情の違いを見つけ出すことで、人々は上手に自分の住居やお店を表現しているということを見発見できた。街を歩くことでの新たな発見の面白さを存分に表現してくれた、小島を島と見立てて地図を作った島田君の作品も面白かった。小島の内部には信号がないということに発見し、生活がその内部で完結するということから、小島を島と見立てたという豊かな発想に感心した。

路地BOXを作った加藤さん、栗原くん、小平さんたちは街にはみ出しているプライバシーを見つけてそれを立体に地図に表現した。プライバシーがはみ出しているところを、黄色いシールで浮き出させ、「はみ出しバロメーター」なるもので、どれだけプライバシーのはみ出しがあるかを可視化したところとても面白かった。この作品に対して僕は、とても可能性があるものと思った。プライバシーのはみ出しに着目して、それを立体の地図として表現する。もしこれを路地にまで表現を広げ、より表現方法を工夫したら素晴らしいものになると思った。

このようにみんなのいろいろな発想の豊かさに絶えず驚かされた一日だった。(松本遼)

町歩きと調査に関して

おかず横丁はたしか四回目くらい。ただ前はもっと人が居たような気がするけれど。路地は相変わらずエキサイティングで、植木は相変わらずはみ出していた。

調査はあるブロックにおける「はみ出し要素」を写真で全て収めていく、という形に決定した(お昼を食べたラーメンもだす蕎麦屋で)。と

いうわけで、さっそく写真にどんどん収めていく。僕は植木をなるべくそっけない雰囲気になるように写真におさめていった。意外に早く撮影が終わったので、どんなものを撮影したのか確認するため、カキ氷屋へ。僕は店先のベンチで話をしようと思っていたのだけれど、そこは小学生に占領されていた。きけば六年生とのこと。六年生ってこんなに幼いものだけ。頼んで写真を取らせてもらう。

道端で抹茶小豆ミルクというカキ氷を三人で食べつつ、話。しかし、デジカメのディスプレイがあまりに小さく、良く分からなかった。それよりも問題はカキ氷。異常な甘さが僕を参らせる。しかも、元来おなかの弱い人間だ。結局全部食べたけれど、夕食以降も甘さを引きずる羽目に。まあ、おなかを下さなかつただけ良かったけれど。

帰って、マックに写真を取り込み、改めて写真を見直す。iPhotのステキなスライドショーでクラシックを聴きながら閲覧。このとき気付いたのだけれど、見ているものが全然違っていた。写真の撮り方も全然違う。もう少し、つめて話をするべきだったかもしれない。もちろん多様性を見せるのも良いと思う。けど、個人の気になることをもつつめれば別の視点が発見できたかもしれない。時間が限られていたし、まだちょっと遠慮していたし、とりえず何か作んなきゃ、というのがあったから止むを得ないけどたぶんもっと面白く出来たと期待してしまう。オダイラさんは遠慮せずに突っ込むタイプで路地もがらがん攻める(え?まだ奥にいくの、という感じ)。カトウさんはビジュアルに力を入れているみたいで、パノラマ写真を作っていた(たぶん僕の考えてたものと全然違う地図をイメージしてたんじゃないかなあ)。僕は、というと主に植木。この三人がコンセンサスをとって何か作れたら、あんなものじゃないと思うんだよなあ。今後は遠慮なく議論しましょう。

それと、途中から参加してくれたゴウ君とシライシ君。ボックスの完成度が上がりました。何につけても、人がいるというのはよいことですね。お二人の意見も取り入れて作れば、たぶんもっと良くなっていたように思います。発表での指摘にあったように、路地をどう扱うか、というのは割りと大きな問題でした。僕ら三人ははじめからなして作ってしまっていました、もうちょっと処理のしようがあったようにも思えます。

発表に関して。

屋根の発表

張りぼて住宅、単純に面白かったです。あとは人に話を聞いているところ、そういう情報も入れて地図にすればよい気もする。視点を変えるのは何につけても重要なことですね。あとは地図を見たい。ああいいう情報を、あのメンバーがどうアウトプットするのか、つてのには非常に心惹かれます。

言葉の発表

カキ氷を食べながら異常な取材風景を見ていました。発表よりなにより、一番面白かったのは班員の取材風景ではなかったかしら。ムービーはいろんな声に富んでいましたね。深読みしがいがあります。個人的に印象的だったのは、あれだけの情報をもってしても、おかず横丁の雰囲気はほとんどしないこと。町の文字は広告と警告に侵食されてしまっ

ているのかもしれませんが。もう一つ思ったのは、必ずしもビジュアルライズしなくても地図は成立しうるんじゃないかしら、ということ。文字の音読などで町のイメージが伝われば、それはそれでありじゃないかなあ、と思います。

島の発表

あの短時間でさっぱりまとめてくるのは興味深かったです。地名から地図のイメージを膨らませる、という視点も僕にとっては新鮮なものでした。そうかそうか、そういう見方もあるよねえと言う感じ。丁寧な地図の描き方には几帳面な理系の匂いがぶんぷんでした。

夜のおしゃべりに関して。

僕の感覚からいうとかなり文化水準の高い集団だなあ、という印象。アートや演劇、映画、地方の話、関係ないけど、将来やりたいこととか、聞いていて非常に面白かったです。たぶんいろんな情報を積極的に取り入れてきた人が多いでしょう(ササキ君は気になったことをケータイメールにメモしていたし)。そういうバックグラウンドがしっかりしている人の作り出すものは不思議(必然と言えば必然だけど)に面白いものが多いように思います。

そう考えると今回の発表は(十分面白かったけれど)やっぱりいまいつ、という気がします、正直。こういう集団が本気を出したら僕なんかは考えもしないものがぼんぼんできるような気がして非常に楽しみでした(実際の発表も全然違うことやってるし)。能ある鷹は爪を隠す、つて言うけれど、僕は早くみんなの本気が見たいです。で、そうなるためにはもっと同じ時間を共有して、遠慮のない感じになることが必須のように思えて。そう考えるとこの合宿は非常に有意義なものだったと思います。まとまったような、まとまっていないような。とりえず以上。(栗原智)

合宿からまだどれだけ経っていないのに、私の記憶はすでに若干あやしくなりはじめました。いろいろと楽しく思い出されますが、一番心に残っていること、言い換えるなら納得のいかないことは、私に不可解なキャラ付けがされたことです。それはさておき。デジカメの中に大量に残された写真をながめつつ、記憶をよみがえらせてみることにします。

まずは、自分の班について。山ほど改善の余地はありますが、今回は今回で意味のあるものはできたのではないかと思います。結果はつこみどころ満載なものになってしまいましたが、製作過程から得たものはたくさんあったので。

プライベートの露出部分に意識的に目を向け、写真に収めるという行為を通して感じたことはいろいろあります。合宿が終わったあと、家に帰る道で気づいたことですが、「他人のもの」だと明らかなもの、特に所有者の姿が透けて見えてくるようなものに対しては、普段は、意識しない、あるいは無意識のうちに視界から排除してしまっているようにふと思いました。また、所有者もそれが自身のパーソナリティーを露出させているということをあまり意識していないんだろうな、と。撮影中に常に付きまわっていたきまりの悪さは、このあたりのことが理由なん

じゃないかとあらためて思います。

撮影は探偵ごっこのような面白部分もありましたが、実際、他人の生活感を意識しながらまちを歩くというのはかなり神経をすりへらす行為でした。この探偵ごっこ後、さらなる素材集めに路地裏に“潜入”したのですが、写真をとるわけでもないのに、なんだかひどくビクビクし、人の家の庭に勝手に入っていくような感覚を覚えました（したことないけど）。これは、探偵ごっこ以前にはさほど感じなかったことでした。地図の制作と関連づけるのは難しいかもしれませんが、地域社会学のひとつの事象としてプライバシーをとりあげてみるというのはアリかもなぁ、と感じました。

制作作業については、心残りがたくさんあります。話し合いの段階ではおもしろいアイデアがいろいろと出ていたようにおもうのですが、思いのほか作業時間が足りなかったり、完成形のイメージを共有しきらないまま制作にはいつてしまったりで、けっこう苦労して素材を集めたのに、ちょっともったいないことしちゃった気がします。とりあえずですが、手を動かして形にできたことは、今後の制作の可能性を広げることにもつながって、よかったかなーと思っています。個人的に工作好きなので、とっても楽しかったですし。

他の班の発表について。地図をつくるという共通のテーマを与えられていながら、これほどバラエティに富んだ発表になるとは思っていませんでした。何より「地図」を作ったのがひとりだけだったというのは、なんとも興味深い事実です。この先、どうなるかわかりませんが、地図に限らず、協力次第で相当すごいものをつくれるのでは？と、なんだか勝手にわくわくしました。ええと、いろいろコメントはあるのですが、紙面の関係上このへんで。（加藤茉莉）

私は町歩き、地図の製作には参加できなかったのですが、発表を見たり、また小島周辺の空気を感じたりして思ったことを書きます。

まず、台東区という町の特長を感じました。小島周辺の古くから残っている雰囲気や、町の台所としてのおかず横丁、看板建築などはとても印象的でした。

また、発表を見ていて思ったのは見せることの難しさでした。発表者が見たもの感じたもの、写真や文字や映像の形で残したかったもの、表現したものをいかに見ている人にわかりやすく、なおかつ印象的に伝えるか、それはとても大きな課題だと思いました。本人たちは分かっている、それを見る人に伝えられなければそれは半ば自己満足で終わってしまいます。中学、高校時代からずっと展示活動をやってきた私にとって今回の発表は本当に印象的で、展示やプレゼンテーションの難しさ、おもしろさを改めて感じました。

個人的には文字のプレゼンテーションが一番印象的でした。見せ方には改善点はあるにしろ、注目した点が画期的で、町の見方を180度変えるものなのではないかと思います。同じ町でも何かに注目して見ること、その町の違った姿が見えてきて、新たな見方が生まれると思いました。文字以外でも、他の何か一つのものに注目して町を見ることも面

白いだろうと思いました。

完全に個人的な課題ですが、初回の授業から言っていた地図を使ったアクセサリーづくりに今回の合宿で拍車がかかりました。町にどれだけたくさんの注目ポイントがあるか、そしてその注目したポイントの表現方法がどれだけたくさんあるかを合宿で痛感し、ますます町や地図をアクセサリーとして表現してみたくなりました。（井上恵）

今回は2日目の10時からの途中参加になってしまったわけですが、少しでも制作に関わることが出来ていい経験になりました。僕の参加したグループは下町に漂う生活感を、はみ出した私物にシールを貼ることによって捉えてみる、といった作業を行いました。この作業により、公共のスペースと私的空間の境界が曖昧であることが具体的に示されたのではないかと思います。まちと人がとけ合っている、そんな感覚が下町や路地の魅力であると改めて認識することが出来ました。

それぞれのグループの発表は、「個性豊かな」という形容がびつたり、よい刺激を与えてくれるものでした。各グループの発表から、まちを理解する上での新たな視点を得られたと思います。

今後の展開としては、先生もおっしゃっていましたが、いまはまだ皆の興味・関心はひとつの方向を向いているとは言えません。それを、うまく最大公約数をとってある程度同じ針路へと定めていく必要があると感じました。それでも1泊2日という限られた時間の中で、さらに飲みなどの息抜きをしながらも、あれだけのものを作り上げる皆には驚かされました。早稲田祭などに向けてまとまった時間を確保し、皆で同じテーマの下、力を結集したら何が出来上がるでしょうか。非常に楽しみです。また、個人的に栗原「師匠」と白石「先生」に編集委員としての必須アイテム、「イラストレーター」と「フォトショップ」の手ほどきをうける機会に恵まれたことは大変おもしろかったです。「えっ!? こんなことまで??」といったことが次から次へと目の前の画面で起こっていく。感動しました。いや、まじで。早速家のパソコンでも練習してみました。が、全く思い通りにならず、ただ時間だけが過ぎていくのみ……。これからも編集委員の皆様にご指導を請いつつ上達していきたいです。（市川郷）

私は一日目しかいられなかったので一日目のことについて書きます。まず「おかず横丁」の由来などを先生が説明。地図作りはグループに分かれて手探りながら、「おかず横丁」周辺の地図を作成することになった。しばらくは先生について小島の周辺を散策。とにかく、戦前からある建物だから古い！素材からも、その建物が作られた年代がわかっていたりしておもしろい。古い建物にはやはり木造が多いのだろうか。ごく最近作られた建物もあるがそれは三階建てが多く、古い木造建築は二階建てが多いように感じられた。なので、新しい建物に挟まれた木造は心なしか色合いも関係してこじんまりとして見える。

「おかず横丁」は、工場で働くお母さんの代わりに担った。工場とは言っても個人的に経営している小さな工場が多い。ベルトコンベアで大量

生産というわけではない。家族が総出で行う家内制工業だそうだ。したがって、母親はご飯を作る時間がないので「おかず横丁」に助けられたというわけだ。工場と「おかず横丁」は相互補完的に発展してきたらしい。伝統的なモノ作りの町ではそうした互いに助け合う社会システムが自然と出来ていったのかもしれない。しかし、転換期がやってきた。バブルの崩壊である。安い海外の人件費に引かれて日本の技術を海外へ輸出した結果、より安い製品が輸入されてどんどん伝統工業は行き場をなくす。さらに拍車をかけたのは大きなスーパーマーケットの出現であった。「おかず横丁」にあったかつての活気は、残念ながら今はない。

私は最初の散策ではどんな工場があるかを追っていた。ガラス工場、ベルト、ポタン、製缶、紙器などがある。服飾関係の工場が割と目に付いた。また、私たちの班は銭湯の場所を探してさまよった。小島地区は狭い敷地に出来るだけ仕事スペースを作ることが優先されていたらしく、当然仕事場と寝食の場は同じ。風呂場はほとんどない家が多かったという。そのため、最盛期には4つほど歩ける距離に銭湯が存在していた。発見できたのは、蔵前通りを渡ったところの「帝国湯」と「鶴の湯」である。そこでは、近くに立っていた地図看板を見ていると、親切なおじさんが、「どこ行くの?」と声かけてくれたのが嬉しかった。佐竹商店街のほうへも足を伸ばしたが、結局銭湯は二つしか見つけられなかった。しかし、ユニークな垂れ幕がちらぼら。その垂れ幕にトリビアが書かれていた。「夏目漱石の見合い相手は樋口一葉だった」などなど。そんなトリビアに元気付けられながら歩いた。

マンションらしきものの屋上から「おかず横丁」を眺めたのは新鮮だった。「隠し三階」なるものを見つかる。屋根の上に物干し台が乗っかっている家が多い。色彩の面ではあんまり派手な色をした建物はない。屋根の上は普通に道路を歩く視線では絶対にうかがい知れないものであるため、「おかず横丁」を何度も通ったにも関わらず違うところを眺めている錯覚に襲われた。違う角度から見るとこんなにも建物は表情を変えるのだ。地図を作るにあたっての忘れてはならない視点だなと思う。地図は視覚的な要素が強いので、いかにわかりやすいものを作るかが本当は大切なかもしれない。けれども一部の場所をいたる角度から見て重層的に解釈できる地図なんか面白いと思った。基本的な情報が伝わることは前提だとしても、それプラス見る人によって異なる情報が喚起される地図は作れるのだろうか。

あとは路地。本当にたくさんの路地が秘密の抜け道みたいに点在していた。そしてそこでは小さなコミュニティが繰り広げられている。しかし、庭先という存在はあんまりないようだった。なぜなら、屋根にいくつか植物を置いたり、道には花壇並みに多くの鉢植えが置かれていた。あたかも花の鉢植えが道空間と家をつなげているかのようであった。よって、庭先での近所の人とのコミュニティというよりは、道と道沿いに並んだ家が自然と一体的につながっているようで、ふらりと人の家に入っていくやすい雰囲気を感じられた。しかし、たくさんの緑が見られる一方で、子どもたちの遊び場は少なく、小学校も減っている。東京ではありながら、若い人は小島というコミュニティから外へ出て行き、地区では過疎が進んでいるような気がする。

今回の合宿はとにかく歩いた。小学校の社会学習以来ぐらい。町の人は親切で、道を聞いたらすぐに答えてくれる。だが「おかず横丁」にどうしたら昔の活気が戻るだろうか。そう考えると、路地を通しての青空も少し寂しげに見えた。(土井麻里子)

今回の合宿には遅れて参加したため正直あまり強い思い入れはないのですが、少ないなりに発表を見た感想を。

最初の班は地上からではなく屋上からの視点で町を捉え、普段では気づきにくい下町ならではの「看板建築」という傑作を発見していました。少しのアイデア（少し視点を変える）を取り入れるだけで、町の見方がかなり違ったものになってくる大変面白いと思っただけ、勉強になりました。

次の班はとても奇抜なアイデアで勝負してきていて「手強いな。」と思いました。原稿用紙数十枚にも及ぶ文字群には数のちからをかなり感じました。地図作りを全く無視したビデオは悪魔的かつ呪術的なオーラ満載で圧倒されました。

島田君の発表では初めて地図らしいものが出てきて感動を覚えました。ほかの班が比較的微視的な視点に集中する中、マクロ的な視点で小島を捉えておりここでも視点を変えるということの重要性を痛感しました。

最後の班はちょっと僕も製作を手伝ったのですが、視点で一ひねり入れるというよりは見せ方（立体物）を作ろうとしたアイデアがいいと思いました。今後自分の作品を作るうえで「模型」という方法は考えにあったのですが、今回の作品でその一例を示してくれて「模型で見せる」事のマイナス面・プラス面を自分なりに発見できたのは収穫でした。

全体を通した感想は島田君の作品を除いて、「地図」ではなく「町」を見せる作品を作っている感じがしました。僕らはあくまで「地図」を作ることが最終目標にあるわけで「町」の見方を紹介するのではないと思っています。しかし、今回の合宿はそれぞれが考えているアイデアを出す機会としては良い機会になったとは思っています。奇抜なアイデアを考えるのも重要なことだと思いますが、「地図」を作っているわけですから、ある程度の縛りも必要なことではないかと思っています。

一人くらいこんなスタンスをとる人間がいてもいいかなと思う次第です。(白石昂之郎)

蕎麦屋にて本村杉本佐々木小川グループは少し狭いテーブルを囲い、少々遅れて serve された冷ソバ、天丼などを食べる。詩などを書いて地図にしてはどうか、と云う。どのようにして、地図にしようかと云う。言霊や声などを、どのように平面上に表（現）そうかと云う。商店街の中、目に見える文字をすべて拾おうということになる。おかず横丁入り口、花屋の前、魅せの女性にどこがおかず横丁らしいかを聞（訊）く。「ゲンジなんか有名だねえ、GWだからお店が閉まっていて気の毒だねえ」とのこと。ゲンジさんは、漬物屋さんと、我々はその後個性的なゲン爺

に後ほど会う。昔のおかず横丁や鳥越の話などをきかせていただくことにもなる。さて、我々はファミリーマートで色刷りした原稿用紙に黙々と待ちの文字を拾ってゆく。自転車、自販機、シャッター、書き写（移）せるだけ、写（移）してゆくの。おおよそ2時間半だ。ゲン爺の話も聴いたから、一時間40分くらいか。

さて、我々は小島小学校へと戻る。そして巨峰おこのみもんじゃ焼きに行く。そして風呂（銭湯、金魚がおよぐ）に行く。デザビレに戻っては、朝までしりとりをして、寝る。つまり作業は翌日に流れる。原稿用紙は、街の文字を抱えては、少しふるえている。

朝、食事は卵パンと上げ底のパイ包みサラダを食べる。さて、この8枚8000字の原稿用紙どうしようかと云う。時間があれば、擬音語を入れて（小川さん）重ねて地図を書いていこうと云う。本村さんは洋次のため朝にかえってしまった。小川さんも10時には帰ってしまうようなので、とりあえず「声」を重ねてみようとう。ついでから映像も撮ろうと云う。途中からきた松本さんが本村さんの代わりにこの原稿用紙をよんでくれる。我々はカメラを回し始め、読み始める。（本当はおかず横丁で撮りかけたが）庚社内で声が、屋上で読む声がする。とり終えると編集パソコンにつなげて、佐藤先生の下で、つなぎあわれていく。一応、完成である。

最後に発表である。気持ちの悪い映像であるし、とりとめのないものでもある。何かひらめくかもしれない。数日中に。だいたいつまりはそのような工程であった。

MEMO

都市における文字というものは、身体におけるバクテリアのようなものかもしれない。文字（言語）はそれ自身の広い世界をもっている生き物のようなものであるし、我々の「行動」はその文字によって分解され、アフォードされていく。我々が、都市という身体を治療しようとするなら、どうしてそこに宿る文字を扱わないでいられようか。多くの通行人にとって、その文字は何の意味も持たない。けれど文字はそこに宿り続けている。我々をアフォードせんとして。

次への課題

- ・他の街だとどうか？
- ・文字をけす、ハンゲルにしてみる
- ・落書きを拾ってみても面白いかもしれない
- ・映画『華氏451』（Fトリフォー）のクライマックスが、示唆深い。（本の所有が禁止され人が本になるという設定、クライマックスが自分たちの作品とダブル映像がある。）
- ・どのようにして、このような試みを「地図」という媒体に落としていくのだろうか。

（杉本譲治 見えざる文字の召還 作業の工程）

とりあえずカタチにする事が大切だった。文字という切り口だけで地図を作る発想や視点は良かったが、限られた時間の中でそれをどのように一つの地図として作り上げるかが問題だった。結果的に地図とは言いがたい映像作品に仕上がってしまったが、それも一つのカタチとして可能性はあると思う。今回の成果はなんとかカタチにする事が出来たということ、そしてそのプロセスで多くのコトを学んだ事だと思う。

一気付いた点など

- ・視点を切り替えると面白い（文字に注目）
- ・地道な作業も大切
- ・街には文字がこんなに溢れている
- ・文字を書くのは大変
- ・奇抜な発想は大切だが、明確なビジョン（土台）が無ければ上手くいかない
- ・とにかく具体的な素材や方向性が必要
- ・映像もどんどん使っていける（発信のツール）
- ・いかに調べて学んだ事を伝えるか（簡潔に）
- ・時間に見合った作業を心がける
- ・色んな人と話せてよかった

何より楽しかったので良かったと思います。こうやって皆で反省を出し合って今後に繋がるはずなので。（佐々木知範）

合宿、時間をとってよかったと思います。次につなげるということを考え、以下の通り、ご参考までにコメントを添えました。その場で気がついたこともあるし、今書いていて気づいたこともあります。

地図づくりの作業を今後どのように展開させていくか、どのような地図をつくるのかということはみなさん、それぞれ企画を考えていただきたいのですが、ここでは今回の作業を起点としながら、どんなことが考えられるのかを書いておきました。

合宿を終えて、地図をつくる、というプロセス自体も成果にしていくべきだと思っています。

■作品について

1) 看板建築（富樫、世一、小川、土井）視点場の転換

発見の喜びがあって成り立った作業。日頃の違う場所から見ることによる発見。ビルの上から、という視点を得ることで、発見が出来たことは大変良かった。その行動力を忘れずに。発表も簡潔で分かりやすかったし、伝えることがはっきりしていたと思う。

一つの家の屋上での出来事ではあるけれど、さまざまな広がりを含んだ内容だった。路地があって、ものが「はみ出す」というだけでなく、

上の方へも、「張り出して」いくということが見えてきて、都会の中の偽りのない風景の発見なのであった。住居とプライバシーの問題でもあり、また古いモノと新しいモノとの対比と同居の問題でもあり、まさに都会ならではの現象が透けて見えてきていたと思う。

「屋上の利用」とか、「都心の住まい方」とか、継続していけるプロジェクトでもある。今回の作業を起点とした場合に、地図としての表現にどのようにつなげていくのか、という展開について考えてほしいと思う。

文献：藤森照信著／増田彰久写真「看板建築」三省堂 1999

2) 文字 (本村、杉本、佐々木、小川) モード切替

普通は出来ないことだし、決してやらないことだが、対象を文字に限ったところがすごい。普段の風景を見る目の「モード切替」を行ったのであって、文字だけしか認識しないようにスイッチを切り替えた、ということである。原稿用紙を使ったことも、スタイリッシュで、意図が明瞭になった。

観察→文字の採集→筆記→朗読パフォーマンス→映像と、同じ題材をメディアを変えて、表現を切り替えていったところも面白い点だ。この切り替えによって生じるズレみたいなものを意識的に増幅してやると面白いこともわかる。

文字そのものからも、発見がさまざまにあった。1ブロックと定めて、それをやりきったことによって、1ブロック分で8000字くらい文字がある、とか、「禁止」「お願い」「宣伝」というような文字が含まれているメッセージの種類の配分比率、とか、風景の中の文字が持っている役割、だとか、様々な発見が含まれていて、現状ではまだまだ解釈しきれないと思う。

ということで、例えば他の町だとどうなのか、とか、文字内容の分析だとか、海外との比較だとか、ということもできると大変面白いし、これまでに類例がないような気がする。

映像に関して言えば、まだ、単なる内輪受けの感じで中途半端である。取り組みを分かりやすく説明するものにするのか、あるいはさらに実験的な映像表現を考え、演出をするのか、など考えるべきことは多い。もちろんどのような場とコンテキストで見せるのか、ということと関係するけれど、ねらいを明確にしていくことによって自ずと練られてくると思う。

3) 路地 BOX (加藤、栗原、小平) 高精細スキャン

普段から、目には入っていて、ある種の印象を残している風景を、あらためて丹念に、もれなく見てみようという姿勢の作品。いつもの目が設定されている解像度を高精細にしてみました、ということだと思う。路上のはみ出しだけでなく、家の中のもので透けてみえるものも対象にしている、覗こうと思わなくても、向こうから語りかけてくるものに細かに目をやって、一つ一つにシールを貼っていくところがよかったと思う。

もうひとつは BOX を作ったこと。これは努力賞で、写真をつないだり、いろいろと技術的にも初めてのことにトライしていたのは、よかつ

たと思う。

今回のモノ、作業の記録としてはよいのだが、見る側に立つと、どのようにこの BOX を見ればいいのか、見方を示してもらえるともっとよいと思った。写真の他に文字情報があってもよいし、立体的に見せるということでは、もう少し凹凸というか、立体感がある方が面白みがあると思う。さらに BOX の中身が何かあるとよいか、とも。

4) 信号/島の地図 (島田) 見立てによる全体像の把握

グループ作業もよいが、一人での作業もよい。この地図は、「小島」=島、と「見立て」ることによって、小島一つの世界として捉えようという地図(というか概念図)だと思う。「信号がない」という指摘は、深く納得した。我々も合宿の最中、信号を使ったのは、たぶん三筋湯に行っただけで、風呂に入らなかった人々はたぶん一度も信号を使わずに2日間を過ごした。当たり前のことなのだけれど、信号がないというエリアは、ある意味で自己完結しているということでもあって、そこには何か行動を規制されることによって生じる変なストレスがない気がする。そうした地区だからこそ、路地ものびのびと使われ、一体感も感じるし、である。

合宿のはじめに説明したように、この地区に限らず、台東区のほとんどのエリアが関東大震災での焼失を期に、区画整理が行われ、現在の道路骨格の原型が形作られている。大きな道路で囲まれたいくつもの地区(住区)が作られ、その中心には小学校と公園が隣接して作られた。これは当時アメリカで住宅地計画の基本となった「近隣住区理論」(C.ペリ)を具現化したもので、つまり、幹線道路に囲まれた住区には通過交通を入れない、という考え方だった。つまり震災後80年を過ぎても、その原則が生きているという証拠でもあった。

この企画、例えば、80年後の震災復興計画の検証、というような展開もできるし(ある種計画的に作った町が時間を経て、計画当初のコンセプトがどのように変化・継承されているのか、他の地区も含めて比較検証していく)、「小島」の世界図を精緻に描いていくこともあるし、また、こうした「小島」という世界の住み手の行動経路(生活の動線)がどのようになっているのか、ということも面白い。(佐藤先生)



Chief Editor
シライシコウシロウ (kos)

Editor
カトウマリ

ドイマリコ
イチカワゴウ
トガシクミコ
ヤマグチカオリ
クリハラサトシ
表紙デザイン
kos

1章デザイン
ジャスミン
2、3章デザイン
イチカワゴウ

扉デザイン
1 ドイマリコ
2 イチカワゴウ
3 トガシクミコ

PC提供 クリハラ

応援 ヤマグチカオリ

Special Thanks トウヨウイチ

技術指導 (小塚コシク Std)
クリハラサトシ



